梁文製錦

春夏　一

六 玉用之内

文庫

[illegible]

ほとゝぎす歌をよむとおもへる人のあやまりなり
もさらぬも文といふ物をすさるる形ゝいを
ゝちをゝうるべきなをいだ亭をんして
うゑまぜるせんざいのゝ如く文をかきの所
うゝなる野山のさはなるべし歌ハこゝは
やうゝなへ[illegible]くふゝハたゝるべきなり

のさ[illegible]ふ[illegible]ことさ[illegible]ふ つくろふ和をな
きあらうめとまわんかやまるふ[illegible]ひりて
おなじ木ぬもをりうら和らのひいきそし
てあんをぐ[illegible]ぐさうるがめくれんひるべきかく
きバ物まわびふんよせわれん人をいづれ
をもるのてわざと学ぶぞとも此ものは

序一

ことぶを一まうりを尼いをおくべうそさる
たみやびわざふもひなをまめをざふもひれ
さらび詞ならで記し物のはおしきうを
うれうをぐひわれんをや或を月花の余岳
のをわふしひれおうとおがゆる物のけう
などハ歌のハよろみつうがくて詞ふ

もいたまはりて書記和尓掛るか
どの旅路のありさまめづらしうも海山
のきしかはりもみるもあるべきのみぞ海
ひきべてんる掛きく掛尓つけてうごくんの
ゆくへをばあるきて人尓もあいまとも
おもはせ後の世尓あつるべてものがたりぬべく

ていうふかひある筆の法なるべきをつゆう
んふなるふるおうぬさしかりていでくぶ
ぶと思へどつきづきしき詞もうらぶのぞん
さんやしてむなしくやるぬるうるれいるる記
わざなるべやハさるれど物よむ道のきる
べき代るふ尓ハ掛して何れと書ぶ毎

いとおかしうめでたく文章のさてはそをとり見
ひろうしばらひ学びの人々をもどしくよりも
あはなぎふのなやむめるをいうでられぐ道引
ともがれとて此ごろ出いでる書ひり紫式
ひやことだの錦を何とやいふふ形りそれ
もいうそ海ふつうり出んと思ひめぐらして

狂この名をる紀立田姫のふし紀ふ又志く拙
ひうぐと也ひとりて拙しるなりり仏ふを
よ紀書うれと見もてゆくふ桐紀ぶより
ちづめ夢の浮橋まで巻々の玄ふいろ〳〵
さ海〳〵紀うを紀るのむ〳〵ふ多ちをけ
て大うる多ふふすなく ひつを紀いでる

ふなん何わけるこうハ袷袍何ゑハ袖何ゑハ帶
袴などの料と物ゞ紀もあり多ゞいさゝら
なるさいでめ紀るゑ何りうらまきてわゞ
多めゝバや大ふ多てと古ことふいひまん
やうふゑゝつゞけるも何り内藏寮造殿づゝさ
などふおゝやけ〳〵くまゝけゝれるもかゝや

何ゝむ納殿御ゝ〳〵げ殿ふみそびつ衣裳などゝ
ふうさゝひゝけて今てうゞいでんとせゝるゝも
かゝやあゝむとうるいしゝく何てふけさうくえゆ
るも何りゑゝよわうのゑゑだゝつめのゑゑぶ
ふ獄なゝるゞもなれバいづれとなく何やゝ
くひなびゝるハなくこゝ由やうふ何ゝまゝ

くなんなるかゝる言葉どもを後よせまゝ
ハ〜なりゆくていちあひつぎ〜くづるいで
ゐゝんゑハその文章より柳樹の春の大路
涙堤ゆ立田川の枝の糸〜紅ゐもをさ〜
おとるまじくいふみやびうなゝむと思ひや
らるゝ〜此ふゝれつゝりぬ〜例の一くぐりを

とゝのゝとゝるゝて思ひよれるまゝ此みぶり
こゝをかゝるゝ

文化四年春

本居大平

一し書は中むかしの言葉にさをさねざして文かくむさ
すがらうるまねびろ人もまちけるめにをまくもけせ足
けきばつねの文かむをたすけとかるべくわぼゆ侍
事どもをばおぼつかもらすことをかく集めぐせり
志この社どもしし書の為にめぐせ侍ることばどもをは
なごがら已ごの文にから用むよとよ者あらびし書
に集めぐせはてばどもによりて中むかしの言葉
ぞうむをくちなまて雅言けさ殘よくわさまへ
てをけせよとなりこれし書にくまる予がんざし
かるすべらく文かくむこころえどもハ別よくはしく
志ゆしれさをもしねざこてにをいちびけてこけ書を
集めぐせる言葉ども源氏物語よけこがさきるを
中むかしみ文とばをけしものがらけ言葉ふばいの心に

もくもれかけまばぞのし。

一言葉をぬきいでゝ。たとへをとくごとれ文の中に春秋れことばうちまじるをゝ。雜乃ことばうちまじるをゝ。ひをいいきはまれことばれおほきかをれ。

一恋乃歌乃中れ。歌をたほゝ。歌のゝ。ゆきば。物語乃ゝるにてを。をれとばかるも。歌をれかしく。秋乃ゝれるたぐひ。のまこれありとゝるべし。

一恋乃をゝ。歌はまうけごとをいゝあるにより。てをべく。歌をまうくゝるとをゝ。ゝれ故をものごゝろふみを。よくゝみをゝ。ゝむれをれのぞゝゝるべし。

一雜乃をゝ。ことばのようくゝるまゝにとゝもかくも。歌いまうけつゝ。あかごのちに。文字をえゝびかどするとをなく。

次ぎにもかくはらぐるかゝとをゝぐ文かくむ人れれやすこのらむやうにをゝとをれとめたり。枕まゝ。天乃地乃をかど。にをれ。乃季乃乃乃ゝ。既ゝいれるゝとばゝをゝまをれゝゝゝ。出さまほしゝきごのいとあまゝゝ。ゝのゝとをこのれどをゝれゝをゝ。乃季乃乃ゝゆびゝてふをゝびゝずゝとかゝゝきゝど。まれゝをゝやむゝとをえゝびゝてゝとかゝことふゝてゝび。いゝぜをゝをゝずべてれ中ゝをゝかきにゝもあゝゝび。

一本文をゝ。師の数本をゝて。校合（コウガウ）へ。ゝゝおのれゝゝゝをゝ。にゝりたまばゝれつゝの本とをゝ。異（コト）かるおもれほゝう。ひまねゝれ人あゝゝふゝゝゝゝゝ。

みれをとれ稲彦いふ

紫文蒙錦一卷目錄

春部

初春一　子日三　踏歌日　鶯五
春雪六　餘寒七　梅日　柳十三　霞日
春夜十五　春曙十六　歸雁日　花十七　春月日
藤廿五　暮春廿六　春雜日　山吹廿四

夏部

首夏廿一　新樹廿二　若竹日　郭公廿三　夕貝日
橘廿四　五月雨廿五　螢日　夏月廿六　瞿麦日
水鶏廿七　鵜川廿八　夕立廿九　納涼四十　篝火四十二
夏雜四十三

紫文製錦一巻

安藝　源　稲彦　撰

春部

初春

初音ニテオ

年たちぬるあらたまの春のはじめ。

くもりなくうらゝかなるかすみのうち。

ちだるよ。雪ゲ（キ）ぬ草。わかやぎに。

しのぶけしきぞ。たゝのすゑに。本れめえらちけり。

れば。のこり人はたゞうつのびゝにぐゝゐるこのしも
ゐしたゝぐ。ゆきはゝ紙しゆふれまへをはよりはで
免。ゝぐゝろれば。くゝ。そのきまゝ。多(おほ)御方(オホンカタ)
はありさま。まひ出てん。こゝは紫たるまゝ
くゐむ。春はれはゝ紫上はは侍方ゝ御殿御前ぐりわきて。梅は香
を。みるはうちは匂ひよりきまゝのひくゝいけふ
佛はは御(ゴ)國はゝ。おぼしめさ。すゝに。打をけゝやす
らゝに。すゝ。ゐ。
(ロウ)
ゝて。ゝのゝ。ゝに。ぬき匂はゝ。はゝゐ。(畫圖)はゝゐ。めはいちひ

万代を松にぐきゝ
ゐゝはゐるよゝせはう
ゐにすゐあゝと思へば
あゝうのやゝゐゝ
をはてゐんばかりも
ゐゝゐ君ゐゐ年八

く。餅そちひ。ゐゝゐみをさゝくりゐせゝく。みゝ。はは。のゐ
に。ゐるゐゝ。ゝ。細流に四年ゐゝをあゝゐ今年はは年はうちゐゝとゐるのゐゝ。はうちは祝ゐゝ。ゐゝ。ゐゝば
ゐ。ゐあゝるに。云ゝ
(三十オ源氏君の初)
。ゝとゐゝゝのゐるゝゐゝゐはいちひゝゐゝゐ。ゝの
ゐ。ゝゐおのゝゐ。ゐはゝはゝゐゝあんゐ。
すゝゝゝゐゝゐはゝゐゝゐゝゐゝゐゝゐゝゐ
ひゐゐゐ。ゐゐゐはゝゐはゝゐはゝゐはゝゐ
にみはゝゐゐゐ。ゐはゝはゝゐはゝゐはゝゐ
きゝゐゐ。ゐ(引手前にあく)ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。

かさとりたるぶつわをとくれいのりを行ぎょうけしとゝ城あるがときこゆ。

苦モミヤウ 年老かゝりぬうらゝこの行ぎょうゝみだれふしとゝきうあるをとゝめでをとくみのきあるをとめ

たる御オホンよりひとまゐりたるびあふめる人けだとゝきこゝばどけをこ七日法オホンよりこびをでたまゝこしきけまをゝ車かるべ。わこのの行ぎをなるをとゝ

あくこゝろよげよ月をとりたぎくのひとゝ。

こゝろけうちをまだそふことをやめんうはべ

最高位位をこうすてそれ乃ち云ふことは一所を捨てゝおるゆゑにたのゝ常世にてたなあ〻ぬとハとり。皆ア乃の豫よりなり。

をゝぼうりこのにゝんゆるゝころはひるりのし。

早歳モ所メ

きけ〻ばのをけいををゝ中君有文礼作方く侵写あるるく

ゝ行るまゝゝ。花けきどゝ礼菜色ばむをのゝうゆの

しく。峯花のすゝけをとけをゝ人すてむゝゝ礼部るゞ

ら中君礼共ゝあ〻ぬ

けゞのけゝゝこゝよゝくゝだゝよあ〻ぬたびをゝくゝ。

若白文礼書

はけをゝ行ゝひとわゝはを行るゝゝをゝゝ行ゞ。

よゝぶゝよけゝくゝをゝ。

ゝゝ行ふ。

子日

雪月のてるかに
草やまつ〻生
作

初音 四十才 今日は子は日 子日 ありけり。げに引歌前は世すり 春をかも
ていそぐ心よ。わりなる日なり。服君は明石より姫君 オボ 方に
源氏君のし わかきうへ社ぞ。わらはもとぞ 童 下 仕 へ。みどりたる社山
社こと葉をしこしきあうぶ。わうきゝ。社こちどもも。
奥へ入しさまし わきどころかれくるゝ。社社どどよりわざとの
まゝく。おあけの事法。こ髭 箒 破子 と云。こ引ろう
など奉る。かつ。そるゝぬる。ゑ社枝ようた
まる。賀元。おそふこころあゝんのし。

踏哥 男踏哥十四日。女踏哥十六日〻。
下社文八男踏哥社さまし。

今年 男十六才 ハ 男 を 踏 ふこ 歌 ハ 男 のみより。内より 朱雀 サ 院 イ に
まわる。みちは ほどなくほくて。花 社あけの 花
になりに。月 社くもりなくすゝまきりく。
うす雪すこしふる。庭社えるゝぬに。殿
上人 など 元。ものく上手 社ほうるこうはし
にくふ元社音 元。と社もゝくふきたて。北 源
氏北作前し 社まへ ゐこふぞ。ひゝ。
かぐすきるゝ。 月 ヨ 夜に。雪いやうゝ
作む。松のぜこぞのくふきたろし元社すきま

まゞこ世ゝ八贈呑
ゞ人。以綿造花差冠
類也。号二高巾子一云
あり。

じく元日ぬべきほどに。あを塵(青色の塵)うかゝまへば
白下重
俗よ。ゝ。ゝ。ゝ

に。云〻

霞

若葉四十オ

はるのにかすみわたりて。空方は捐ぞこはのと
あうけはりわたるほど。高よいとよく見ん
ものをうれし。

円八十オ

○日光にうるのきにつまこぞゆふ雲の
いろこのすゑもとるにまぎれぬのはしばの
きはは光はるよ立ぐたまふ。

春雪

椎本廿七ウ

くれはてゝなほ。ゆきいとぞ〻えとぞぬづう
侍りと。御オホンと光はれ人こゝわつくまこそ。云〻

浮舟廿五ウ

○京にも京まつばうゆきこれとるもとるゆき。山
ふのくるまゝよりはみて常よりも。
わり引きるれのほうみち就わ者行ふほど。
御オホン はは光はれ人こゝなきぬぞうれうるわ
ぞはきこと就さくれたふ。

円廿九ウ

○雪はふりはてまるに。雪すもの就ふり
ものを。霞はたるくに木ふばうこゆ山も

かごをうけ出るやうにぎらくはだ日ふのや
きさるによべわきくらちれわるまさま
どあはもれほうろへくるる紙ふ

白文 峯れ雪汀れとほりふるわきて君にぐまぐふ
道をるどはぐぐごはれ里にらまきめまでる
ぶぐあやーきすぐ戸めーいでぐ手ぐるひーれ
まふ。

浮舟 隣りみぐれるぎはるこほる雪より元行の元
いそぐ吾をけぬべきぐこのきげち手ぐ此中京を

ま城れ木幡は里に。
馬いあれどごうちよう
ぐくる。君を思ひう
ね。

行ぐあ行ふげよにくく元このきくけるのれぐば
げこのくくてひきふくりた。

餘寒

早蕨五十ウ
ぐくれ雪ぐ元。白文北北君れ表北 ぐあふりげるえ北こ
すくれれるよるになりてばあーう妙き
いげるこのぐれ雪ふ。餘寒むくまく
きむげよ。れれ大殿 油 ふぐ元きくた。云

梅

ま摘花冊六十ウ
日ふいぐくくこのるるにぐたーーの思かすく波

まる梢どをけ。ごろうもと。ゆきゆかに。梅はけ
しきばかりほのぼのとゆ。ゆきわかるゆ。ゆきて。ゆ。
はつかしけれ。紅梅。いろいろさくさくれ
いろく。ゆきにあり。

初音十十ウ
○花は番さろ。ふゆふ風。のどのに打ふきたる
に。はまくけうめ。やうくしえゆきてあ小さ
たりのる時をとうい同
さまでどきさのるに。はけちくべゆえかもろく。
催馬楽の謡
こはさのうちろで。たるしやうし。いと花やの影。
同十三ウ
つあれはるるえあけるどすて行をあと

ろはけそひきぐのにくはまくはけ木だち
ばりりぐいとはれをしろく紅梅はさいでを
ゆにちひるみどみをやすくを多はを見わと
紗ひく。

源氏君
ふるまろはけ春はたずゆに尋きくよのはるまう
ぬ花を見るこの邦。

梅枝四十オ
○きけ〳〵ひはは十日。雨すこふくふくはまくちこの
ま紅梅さこのりにゆろをこの元。似るえはまき
ほどに。兵初つはえ。源氏ゆうり出ゆ。

○風さう（日下十六オ）ぬるまぢ。大（御酒）きまでまるうるひて。昔
は。のがうるどしまふ。のすめる月は。の。
ゐにくき。雨はまごりは。ずこ。以て。花
は。のまたのきに。御殿し。れ。ぶ。はまぐりこしぐ
匂ひみちく。人は。御ぶこちこ。えんあり。
○やがて。若菜上四十六イオ。多いぶ。てば。ちまくおそ。まい。
ちるき。御（オホンゾ）衣ぶ。ぬき。行ひて。花をすさぶ。
ひは。友また。雪はのこる。人に。打
ちとうふ。氷。て。賞はわのやうちの

き紅梅は。末に。うちなびくるを。袖こうにか
へと。花をこきあつて。すれ。あげてゐの
見るまで。夢にえこのる。人は。れやにく。
れもきこ。雨と。見て。紛ぶ。わのうちまま
のうき。御（オホン）さまあり。（源氏はきこれ御さまし）
○正月（日下十六ウオ）廿日ばかりにまぢ。そこ。花のき
ほどは。尾ぬる。くふきく。れ。人は。梅。そこのり
にたりゆく。ぬ。はうまと。は。花はきぶ。元。
きばく。の。ま。こ。わ。こ。り。に。あり。

（朴花は八重にて。にほひあり。はなは。ことに。賞美せ。
く。）

四五丁オ
○恩あるたうのもとでさけうるのみさこそ
はふる雪ぞ花ぞいでられぬ枝えたにもば
ようさけみぶしれとりゆたかにうちつくね
にこそるべず匂ひまさるみちはいかもも
ふきあはせ（御殿）ぬ。鶯さそふ法華のしべぐく。
いみじきはなぞ白ひろり。
四四丁ウ
○月やうくさしあがるまゝに花は色香も
てはやさんくしげいふらるにくきこゝろあり。
紅梅九丁オ
○こは東はつまのきちうのきこゝ嘉はいとこ

君すべ誰にのこせんぞ。

紅はいろ濃き色にて梅はいとのぶくことくにこそはぶるはる。

元しうく匂ひまさるを（光孝天皇の御歌）
はは花ぞいろばつあるくこゝろ
えうちにしもさすがり。一枝をりてまゐる。
考るに〳〵ぶ思るとて云
四十二丁ウ 紅梅はいとあはれ花
○こは花を奉る（古文）ぞうちあくく
ゆ（引用未詳）
ゆくまゝのばさくく打えたのぶ乃むず枝
はさまるぶさうもこの色よはけまゆび。
白文詞
園にはうつる紅はえにぶれ多なむ
しうさ梅みをたとまるを（いとめるを）いと

このこくぞうのうめのはなさいたるものにて。
御ぞうどめめくるはなのまさごのうひあつて
をてくやしまふ。
竹川十二テオ
○はなよりはるかに梅はなざこのりあるふ云こ
四ウ
○はなはなかりえやまぬまじざいざまつべしゆへ。
まつまさごとたびびしこてびきはまてこして
はつるこどはくまへる。紅梅はなはやとま梅の
はうるふさるやちつるけちひの花よりう
をまつるぞとうちつるはへまさはなれ

しあけてあはぜまをいとよくこのきあはをう。
早蕨ワラビ
○さうはは御ぼんこのきまをしはけ。例はしはら
芽
つよせるる梅はのをめでれをするまつばをを
れをうてまつるるのはいとら
んるめでをとをはうはをはうばはて。
白ラ
をるるはは御ぼんるのふはるをやるまをいずず
をつるにはへるこのまへまつ。
菖蒲
みるこのごとをまつるはをはうをつて
こをはるぞうはは。わばうをうをたそぶ

もこのはしもくるゝ
ハナヤウ
ゝ
れまへちこのきさ紅梅はなもの色をのこしたる
にうらひすぐに咲すぐ
てわるくなまじ
ぶたちはなぶ
きまりこのぶ
らうはなぶ
たゝひゆらう
けりまえぜはうきまぶにえんさぶめし

やはりはさ

はさまはなぶ
はちはなぶ

えてあうびのはしもはなぶ
へぶ。
みるへえめしにまふ山ざとに昔はだ
ゆうはなぶ
たくぶ宮
て。
蒔君
袖ふまし
うけうふやぶ
くはぶ

○梅やはれ法まちのき紅毒は咲もこの花のはつ
ぬをぶ乱雲やむ夕はれ花ゆもと社ふて
ろよ世はあるを。あのぞうまほしけしみ
にあるにやは枝にあの夕てまきしを世と
まふ下ら〳〵は尼はすこしわのさのあ。
しをく花をすまるぶ。ぶこと。かまくち
海よいるぶまひくまぶ。
神ふまし〳〵ろうたてね花は春ふまこの花
もふふ雲は曙。

○柳

賢木四十四ウ

心けわるる池はら岸は柳の葉しき
ばこのりをぶ時はわすもぬるぶ。さまくるぶめ
らまし折ひく。云〻

推本四ウ

はるぶ。わこのすこわるるさそ
あまぶ。今ひ〻雲うめるぶ。いろくみわを
さる〻に河うひ柳はぶきはーまびく。ぶで
このげるぶ。ぶるこのまーぶれこのきを。白雲をまなを
らひ折をあ人をいるぶーしくみまて

ごのくしとおぼゆる。

春月

未摘花九十オ
こしたにくくまにのこる月れのこりさびしさに。
雲のくまゆくるみちもはるかなる。ぬきこめそせて。
大殿にわたりぬ。
頃ア十三オ
○月れいでぬ。池ひろくやまぶかのきわくさびしばゆるみゆるもずこはるまき
きくうぐいす。岩ほの根のたぼ。やらる。
四上
○あけまきうへる月のげのなまめかしうさ

めやかのるまよう。源氏君のつ
ぬ。ちふるまひまるるまこほ入仏
ぬ。ぬ。ぬ。

て。ゑこは御 捷じたるやうあり。

若葉下世三十才

○月ろろろとまれほどなるみさろ燈籠ゆくこと

このゐにこのみて。犬おきほどなるをもとり。

円世六十才

○秋ふけゆく風はけたゝひ。をやこのるふ

二月十九日

まちれ月。ぱつこのにさいでまるこゝろを

なすしや。

竹川世三十ウ

○月を秋のこゝろあるまゝひとよりえば

しまもあうずるのぼりて。云く

早蕨十六十才

○七月れ月れさるやのまさ山をまるこのげたす

しくかすこまるこゝろ秋見ひぬいたはきに

なしはのぞくるもしけもぞうれのめしま

て。

中君

なこのもまこぞ山ろいで。ゆく月えをにすこ

わびくやまにこゝろいま。

浮舟世三十ウ

○にいまちぐれの小月秋よすこちし

ちこのく蛍てまのめいぐ山ろ。

須十七十ウ

春夜

明ぬまこぞ。秋のこゝろ出るふぬを明ぬ月。いて秋の

しうの花は木どもえやうくさのりの色(ギ)こくわだいの
ゐる木陰のいとおもしろき庭みらるあるく雪
わらはもそのうこはのはれく霜あひく。秋
は秋のあさまにたがやくまもちまきれるとすこ
のまはのゝらんなどれ　源氏君
ごめ約言はきみ奉つれくもと
にやはまだれ　あけてゐもり。
○月きさ　夜東菜七十オ
えぬほど船をもてあそぶ舟をよのなく。

春曙やうく白くなりゆく山ぎはすこしあかりて紫だちたる雲のほそく棚引たる

たほみきまわり。ゐあうじしあり。
春曙　巻枕ハ十ウ
明ゆくくるまいとうう霞うく山はとり
ぜそうこはのとのくさ(ばりめこ)とり。
名をもゐ木草はなどえなくにちり
まぐつとすきはもゆるにしこのはた
きずくありくえめばしく見ゆるなや
まさきすぎこれそれ。　終合ニ十ウ
○あけぬるまゝふる花は色えへ人は御このこち

はぐ〳〵ぽのこのに見てく。鳥はさ(ぢる)まど。
こゝちゆきぬめでたきあさぼらけ哉。

帰雁

須ナ四十七十オ
あさぼらけのこゝろみ。雁はまくわるあ
はきみ。

ふるさとはたゞまはさのゆきくゝもこゝろ
やすきに帰るかり金宰相(ツネ中将)さるだちいでむ
こゝちせぐく。

ひ中将
あこのれくるこはれさとよをたちわの花都

ま
桜ちらうゝ
せハある　大カタニ

鬼ゝくもなぎ山
里はさゝ花ぶの

りみちやまぶきはん

花

端紫ニテウ
三月はにごりなまぞ京はは花ざりもらし
すぎにくり山はさくゝもまぶさこりいでぬと
えてはさるまるみ。霞はやぐずまひえおぶし
う見ゆきぞのくるありさまえゝひ紛さび。
はくらやは花都身にくめぐりしぶばぶさ社
けり。

花宴十二オ
○花ざりもるに京はやは飛はちりを人と成

ぞ面白き。

○須ナ四五十ウ すまにて年このゝ日ゐのくれまくある

にゝ名し若木ぞさくゝぼのこのゆさぞろ

めくぞ此条色ぞらこのゆるゆるぞめ

こゝにぞ山ぐらまてくぞうちなきかふをゝく

おくおこう。

○日上キサラギハツカ 二月廿日あまりぱゝ年京をわつまて時。

ひぐゝしこのうしし人ゝ此御ありさまるゞいと

ゝひしゝく南殿のさくゝを盛になりめゝんぴと

年此花のえんに淀の御条色。朱雀院此東宮にてまし

ゝときよゝゝゆるゆるあゝくわゞのたくまる分此。詳しい

ず所ひしゝそ松もひ出きゝてゆふ。

源氏君 いとゝくゝ大ゝ人ゝ此ゝしきるさくゝこぞ

今ゝ日ゝ此きゝにゝゝゝ。

○ゝ朝課ハ十オ 紫上ノ方 ゝゝ紫ゝ此ゝ此ゝ山ぎはゝこぎいでぬ此ゝ

いぞるほゞ風ゝきゝゝのめ此さくゝずゝゝ

ちゝゝ此まゞのゝぞいゝゝゝゝゝゝゝ此此ま

より平もちいでゝ
○夕の歌（夜裏葉三十ウ）
みぎとれ雪たどくしきに（内大臣）
しいでゝなまめかしうゆかしきなどのめり。
○大将殿（若菜上九十九ウ　柏木君し　夕きり竹君し）
ぬ花はこの歌にさまよひ夕ばえ
ぎるり。秋さくさまよくしぎうぬみ
ぎとれぶしあめまこと。所のり人ゝ（蹴鞠のさまし）
○故あるうはの木立（メヂ）はさくこのみこゝあるを
由ゆゑくひもときわてる花れ木どもぶしめ
るるもぎれこのげゆかくはるるきことゝ。
よきあきげちめあるをいこゝはさく。春元
むらゝどもしこのはるる中よ。（柏木君し）
うめにぎもちるドアるあ。ぎとにゝ
ぶ人ゝのうゝ。ぎもちこきよげゆるる
めきるるさもよ人ゝ用ことうさく
てぎすゝのみぎうのぎとこゝ。
上にお
ぶ

○みちのくにまつあるさくらはこのげるよりも。
ひとぐ花はなうへにもわすまてくんのよまるる
をしかれとぐえ（宗長君）ゑもすみはのうらんはいでく。
佛らむだ。てらくある心ぞんどを見て
て。のずおほくの月ゆくみよらくえこだ
きくぞくくふりはひずしくたくぎ
さく。
○もの（日ウ）の雪はやうまのうこのまばうち見あ
げくちはまるる枝ずくれをうて。（夕青君）

みちのくはのほどにぬをまひぬ（柏木君）
はきこげきく。花みどりこそくちあり
や。さくくそよぎてくくるどのさまひけい云
○弥生は十日あまを花ざくうまて。ろはは等色
きどくえらくかよをろくはゆくろくはは枝ち
するかくろはは花ありさるどほのくをひ（ほどヒ）
やらまくくをるふこのきくくるきく人
さくはくくくはひたで。
○三（日ウ）るさくくこうちあはををくたどこのよをを

すぐるころ、みやこどり、おすろ、ぽのくに。
あきゆく、朝ぼらけ。霧のまより見てをる
法花堂いろ〳〵なほまさに公ことりぬべくに。
ほひわたりて。をちかたもちかりけり轉るえ。ふれ
吉にだにとゝぬこゝらしてをけ。あるれえ。
れゆ一ろさえのこゝぬほどよつ陸よゝわ王
けを詠てぎゝうにるほどろすふたのるれ
がくぽるやこのにぎはゝくきゝるにゝ紀
人けぬぎこのもるをけゝゝるゝなどえ拾

けをりこのゝにたのゝけゝ見ゆ。
○花を（紅ニテウ）ほのこのにびゝけきゝけゝたのゝき
ほのぶけみほひまり。
○はけけの紅（はセテウ 遡上れ遺言れる）しのぼとくたいのれをゝけ紅
極ゝりわきゝ（白えの）ゝうみ有きゝ紅ふをゝと（泳式）
（君代し）ゝ新上みをてまつるふきけゝよにるまぶ。
をれの木どえけをりにるえまぶゝき
えゝ木おのゝう震るにこの（紫のゝ）（十四）詩の
をみけ紅妻に鳶けをるやのゝぬきゝで

たまゝぎたちいでゝ　げんもぎ。

（源氏日）植てみし花だにあるゝ宮にあるゝ宮のほ
ゝえきゝ鶯ぞなくうつきめりき行ふ春深く
ゝりめりるゝみたれまれるぞ　ゝ　ゝにのぼ
ぬ花ぬぬで　ゝ　ゝふゝ　ゝにをゝ　ゝぞ
ゝゝゝ

仁木下総守てがらどゝ成あるべきを。掃元
えらびきよどゝのこゝ。おもひえきり此
れをひくの行ふかほのいとうけてきた
元打（源氏五の巻）あるべきはたらふぞりけ袖元と
めけれ人よりのりをいとこゝろがよりゐ
ゝうまどゝはきみだり成ぞてあるべ
に見奉るあふさ（源氏五の巻）みよる社きこゝと元。
残るすくすや命とゝものゝまゝば
かけらふぞくと元斜面をゝあゝじゝし

ゝく。例は涙ぞこゝ人まゝぞゝと（白き物）ゝと見し
てゝはゝはのあひゝこゝ成。まゝのゝくゝうはた
まふゝくゝふゝめまりて。御（オン）ぞは袖をひ
きまきぞりあぞゝけゝぞきぞゝはゝ
きゝ。
○あゝはゝ（四十十ウ）はゝのゝふをゝてゝゝと面白く見ゆ
まゝぞ。夢にこゝろよゝをゝりゝ人あくて花
はゝをゝをゝまゝぞゝはゝと見あさる成云
○やよゝ（竹川十四ウ）りてゝさゝく梅あまゝぞゝちりこゝひく

えりぬかれたる社寺
○天遠き花のあるうひをはぬ　ぬのうへ
らし行ふ風あるこの吹きるゆたの
まぶみぞ社おつるごとはをしらぬあて
しけるぞ。まぶのぐ社雅君。
月方の雅号
さえぐゆる風ふるこころ社さわぐのしれもし
くまるまさ花と見るく
○花盛りまて四方社寿元ものめやるはぶ社見
雅木十七ウ
変あるよ。ぬ社元やまぶ社元。哥どえれ

あきぶぬ　あきぶ
宿のさくら花ぬや
すくや風にちる
らん。

ほのぬ　ぬ　ぬ　

[illegible]さまのこゝろがけ出でるまでの事共わすれ
うちすてゝこゝまでにわらうてゆゝしう思ひ侍
けまをにゝどぎまうさ花のつゆもこぼれ
いとこれやゝしう式に衣をまとひのそまし
[源氏月こもり]もはずよみでけるのをうべたとまいそぐ
ふる山ぶきの花ぶのまよんてけゝまでのこ
まのえきくゝ人まし。
[幻十二ウ]○思いけまくけ山吹こゝろ物をみて袖ぬれ
けさるまし。ふさけたはきさまどよゝ。

たゝのうまどきぬれきくさりける花よやあんん
花やのにゝよぎはゝしきこのあさゝいと面白さ
えけるまんありけるゝ人まきまを
あゝずのほまるくけまうゝ色ゝ
たるこゝろ。藤よ侍まゝのゝまん。

藤

[後裏葉六十ウ]
いもけまあやのにゝむべゝしき御ゝ松ゝ
こゝばのりまて。花けゝうまゝ
[花の浮を]花いぞしまゝとまくゝれゝ黄いしる矣と

にぬれたる。ぬきをなをしたる。こうぐのくちすてゝちるぬるぶの。うゝあゝうだがゆるゝろほし。此さ(咲)ものひとりもちれくるゝく。夏にさいたるるほど。あんめやゝくゝろにゝく。あはきいこれぼゝとぐゝ。色をそ。なをたゝき(裝を立たゝき上たゝし)ゆこのりにえゝ。けべゝとゝくゝちほくをたるつるゝけゝき。ゝるゝほひきよげすり。

○七月(月ハ丁ヲ)七日夕月歌。のげかはのうたに。あれのでゝ。はぶやのにかすゝわるゝりげまぶはのゝ。

ずゝどゝえれ。さうくゝきゝゝろなるにゝとゝこう
ゝゝきばゝゝよゝこたゝをまる松のゝぐゝかきほどゝは色
あゝ敢なゝかゝゝる藤はきゝよの事なゝげれゝゝ。
○又兼に。藤はいゝこれもゝろく。咲の色ゝる色(竹川ハ丁ウ)
水はほゝりの石よ。苔をむゝゝろにゝく。(黄色の)詠め居さ
ゝゝつり。

暮春

(若菜下三十ウ三月廿日)
ゝゝにゝゝむゝる霞のゝゝきをあちらゝゝく
ゝゝゝゝゆふ風よ。光ゝのげ。いとでをゝ事や丈

（花し）
（蝶鳥）
つまいとうつくしうてとりいち
く

かくてぞ

春雜

花宴二丁ウ
月いとよくはまてぞうつれる事色ふかくて
ちよげなるこそ
胡蝶二十オ
○やよひ十日のあまりけてうほひ。（紫上）春宮御前の
ありさまぞ。ねはうとに。ゐうしてをほふ。花の色
こうれいふぜ。ほのぬ。里なる。まぎれぬ。ものめ
ぢらしう。見てきこゆ。山ぢ。ぞらに。島ちわうう
色まさるこけのたちさなど。（紫上の方のへくれ）わかさ人くれど

川かぜ。ものとなくれもふべのめるに。かくぬいこる
ふねぞくくせ。紅ひる。いろぎさうぞかせ紅ひて。
たゆはじめさせ紅ふかき。あをのさえ人めいく。
船ぜのくせらるみこたち。上達部。あまてま
わり行つり。中宮（秋好）此ぞる里なれたりますがり春
まぢそれそこぞはぎまりさこて紅てりし御（ギヨ）のり
（紫上の心）
定此こころやとれがしおとでれをみもいので此老
（源氏君の心）
（秋好中宮に）
ぜをり御らむぜ。さ勤んとぞ。ぼれ。ぼ。ぼ。
つぐなくてかるくかよばひわうり。老をもてあそ

び行ふべきなれば。わのきこ女房をとりて。をの
めで〜ぬぐをを。船にのせ給うて。南は池をこな
たまに。紫上の方こ。はま〜かよはま〜なる世界へ。をぶらひ。さて山
をぶ〜ぐてはせさに。見せこれごそ。西のさ北より
こぎまひ〜ぐ。ひんが北りどのまこなる。はわの
きく〜。前はめき世界ふ。龍頭鷁首をかゝ。のよ
うひまこと〜くしく。ぶ〜ぐ。ひてかぐ。ぶりさ。
はすわ〜はべ。ふまみげらゆひ〜。もろこ。だ
たせく。さるたほ。まなる。池のなかに。ぶ〜。出き。

まぶ。まこ。はれを〜ぬ國ふ。きたん〜。もて。袁
にはるもろく。ぶ。島は。ろ。はれ。岩。のげふ。き〜。を
て。ゆ。まぶ。ほ。のなる。きはれ。ぶ〜。ずゆひ。を。たぶ。繪
に。のい〜。てんやう。なり。こなる。こかなる。霞。あひ。る
桂。ぶ。を。ぶ〜。き。を。引わ。ま。せ。る。に。はれ。ゆ。の。こ。は。
る。ぶ。る。ふ。に。ふ。んや。ら。まて。逸。を。ま〜。た。る。柳。え。ぶ。を
た。ま。に。る。花。を。ぶ。ら。を。いと。ぬ。匂ひ。を。袁。ら〜。き。り。
か。は。き。り。ま。ぶ。た。る。橘。も。今。は。り。に。わ。ゝ。ゐ。み。
廊
ら。う。を。め。ぐ。れ。る。藤。の。色。を。こ。ま。や。の。に。ひ。ひ。け

ゆきにうづまりて池の水にうかべるうきも
吹ぞ〜よりこぼれて水のなり水島ゞ
もれ出ぬびをはなるゝあそびけぶ。ほうき枝
じゞををくひてゝ。ひちがふさ〜山波はあやはん
をまでへたるゆゞ。もみ〜ゝやうにをかさいまま
ほきにまこにたゝ〜ゝえをくぶいけぶうれひ
けく。日をくゝけぶ。

女房達一行
風ふけば浪れ花さへ通ゆてこゝや名にたてる
山吹の花

春は池やあでれ川流にのよるんきーれ山ぶき
そこをにやへ重
こゝからへれ山をたつねゞ紅ぬもせぬ名をバ
こゝに殘さん
春は日のうらゝにぼーてゆく舟をさをれ波ぐも
むぞ爰なるなどやうればのなるこゝゝでを殘ふこに
いひのそーけぶ。くん雲をわすれぬべう。わのき
人ゝれんをうけぶまこゝとわりなる水の面になん。
くれのるほどよ。わりじやうとふがくれ〜ろく

皇慶

きこゆるにんにくあぶらのさとしれ
てわらぬ。
○春はうへ紫草いぶきに佛に花たてまつる世行ふ鳥
蝶よりうぐいすこわけこるわらべ八人がこもなど
とにとりへさせ行ひて。鳥にもどろかねのそれ
がめて。樒をさ。ぶ。樒をさ。ごがねのこのあて山吹をお
なじき花ふさ。べのめうせになき匂ひをいく
ちせもつて。
○やよひ十日ほどなまぞ。こ。をうらにて。人の

こ。ろもの。びえれもろをなるにこ。
○年かそうぬまぞ空れにこうらかなるに行
れ水とけわるにこ。をうまでなのこ。べるを。
ぶがこ。をとなるめ行ふびどれ坊より雪こ。
に植て侍るうとそ沢れ竹岸れわ。びなどを
見たいつもなの御臺にまるを。につてこ。か
ある草木れ筆を色にをこがひて行ふ月日れ
を。見ゆるこうれてれなど人れいつを行れお
かこ。をなんとこ。て行ふ。

大君 君ぐのをる岸はれわ〜びとみまーかどをつくるやを
ま〜をれをるまを
中君 雪ふるを汀はれてぞり誰ぐあていつみこのはるやは
んれやなるまてなどはるまをこと紙打このこと
ひ降〜明くし行ふ

夏部

首夏

蓬生ナセイオ
卯花きばかるるて。ちるはれをでれあひいで
きこしたまひて。おのびて。紫上ニ
さあおそでいでたまふ。日ごろよりはる名ごりは
あめずこしそ。きて。れのーきほどに。月はし
いで。さりむうしれ御ミ。ありきれぼーいでられ
てえんなるほどはゆふぐくよてみられほぐ。
よろぐのことれぼしいでれをするにがと

こえなくあまをきるいへのごとちしだくも
四月やうなるをすぎてまふ。れほさなる
五月さつきのつゆて。月かぎになび
きをきるかぎにつきてばとほふぐなり。この
しくそこはのとなをかぎりなりたちば
なるはこのけりてわこのしたまをてはしいで
たるにやなぎをいとうもぎりてだい
ぢもさはぬぎみぎれふきりをしこ
ちするこぢかれとれぼをきをもう此

常陸宮さし
文ふりけり。
○年（少女ニテオ）このけりふみけ（詠ル）かんくをもをぬまぎをせ世界
色あををもとまりてこうもぐのけほどをぐを。
いまめのしきをむまきてまつ（加茂巻ニ）こうをれを
このふけうけ家色。ふちよげるに前栽院
にを。ぬ出てくをうぐめ行ふれまくるこの院
らけをふ風。ををにのしきてつけてをわをき人く
をを。れをひぐるくをあるを。云く

新樹

四月、天気和、且清、緑槐陰合沙堤平。

胡蝶（ナルテウ）

あめのうちのたるるおどろみのとそのしめやかなるゆふべ。ものしたまへるつれづれのはるのひ。ものしたまへるのにしげるあひたるどの。ゆふとるくるもちまよるおぼるるまし。ぬるまし。ひくぐもりてまつきみをとずたまふ。云々

若竹（ナヒテウ）

わかたけのきくまもみのいとわかやかなれひとすぢくさまれるそのしきに云々

なきえの宿にはいかがはるのひそねまのくさくとつぐ。

郭公

苍散星（四テウ）

ほとゝぎすあるはるのきりはるるやたるのとも
忘れがたちかくるくるとりのこゑのはるをたづねて
ほのぼのとあけぬるをとこのこゑ。

蜻蛉（ナハテウ）

かげろふのきたるはなのなかのこゑ。

特鳥（ナ二テウ）

ほとゝぎすのこゑのはるをたづねてわかるるかなし
すずめのひとりぐちあふものまぎれきこえず
にぐるに渡（ワタシ）ふるはるをたづねてはるをおくる。
はるをおくる。

（美男）おげびとやきみをもらひもあきーだけ
たをさにこころかよさぐ

夕貝

（名負 三ヲオ）きりこのあぶたをのよどあ袖をうるかづる
けこころちよげひのこまるにーつきに花ぞ。
たこのをこ乱やうを。をまをひけるをちか
た人よ物申（モノヲス）ふ。ぶさうぐち新しを御随身丸
けいゆくかの白くさけ球をん夕ぐほと申レ
侍る。乱け名をひるめさくーかーあーきか

（源氏君）きくにあんさきを侍りをやけぶよいと小家ゴウ
ちに。もぢすーあ侍るわるけこのをかけあ
やーう。打よろぼひくむ。ーーの軒
けつまるるぐに。ぐひまそ行るをは。
乱けちぎうやひをふさをうてまるをけ
をまへばこのたーあけまるーよ入くをるさ
すごのよ。されをちるやうにはよ。きこるをしの
ひとくばのまーあがくきこまーをるかーはの。
たのーげまるーぐきて。（隨身をし）ちもまくぐろ

きゝ所ぞいとゝこがれたるぞこゝにてはきゝ
まほしせよ。枝えだのさゝけるものかげを
さゝぐ。せたまぎのどあもて惟光ぞ朝
ほぞいぐきてゝるしてたてまつる。

橘

（巷安里四十ウ）
妨月ぞ月きしいぞるほどまでとぐ来ぞなき
ゝのまぎこそぞぐらゝ鬼わらうてちこのきた
ちぞ鬼のまをとのきをとのしくるほひて云

五月雨

（月二十ウ）
ぞえぶれ乃空ぬぎしゝうぞまたるせまよ
にわゝう行こ行ふ。
（冷標十七十ウ）
○又月雨ぞ。ぞまほゝろ。ぞわやけわゝ
しゝぞのしぞけるるてぞがわゝてわた
ぞ行ゝう。
（蛍十五十オ五月雨ゝ）
○長雨御ぞよしぞ。ぞよぞ。ぞまほゝ
ぞまくぞけまほゝまぞ。御（オホン）立ゝ繪えのぞか
たゝりまぶぞ。ぞすきびてあゝゝ行ふ。

蛍

芙蓉峰十二丁ウ

小野里まで。いとあつく。あげまきなる青紫の山にもすひくもぎてこゝにやり。こしの。ほそぶとうの。紙むすび。見ゆるまぐさめにて。ゆるがぬ内をつるにまいのはとゝよ見やらるゝ。谷は軒端より。花ゐとゝまれ。いとゝれほうゐに。中ゝる火はのどうまぬひうの紙みるゝ。尼君たちばゝ。でぬまり。

夏月

明石廿丁ウ

いつくふけゆくまゝに。濱のゆすゝしうて。つきも入がたに。ゆるまゝに。すゝまもうく。

逢坐廿三丁ウ

先ぶ。ゆるゆるほどよ。云く

ひきうりぶるに。まうてゝ。ゆ。はけまどはめき。たるもよう。さはるぎきわ。渡紙のだつやそ。ゆく。軒は。はきそのうるはけまぎ。ぶとまるやゝ。きいつとたまぎ。あうく見ゆるに。ものに。はゝぬ。御（オホン）しそひのさまみぎ。ものぶ。草にやはきたるゝ。はは見るあうゝ。やゝ

君はゆきにたたぬ。
古くぶけものぶ。
ゆきうゝ。

帥云丁八帳したゝあ
はゝ本八節し塔か壁
室ゝよりゝ顔叔
子ごのゆもうたにさ
らにより。きさいく
河海或説の桂中
納言物語のことゝ
にまくあるゝとゝ
ア。

びこのるみゆゝるを。むのうゝのゝるにてすこばは
ちゝるゝ人をありけるを。あしばゝ。ゝ
にゝるゝるゝにさまにゝどゝりみけるをあは
まゝまり。

胡蝶廿二丁ウ

○雨をやゝゝ。風はゝ行くまゝまだ花の
にさゝいでゝ出る間のゝがたすきよりみさま
をゝしめやうるにゝ

瞿麦

紅葉賀十七丁オ

わまくはゝ前栽はゝ。ふゝをゝまくゝ。

まゝる中よどゝこ夏はゝたるやゝのゝ咲出まゝる
を。ゝゝせゝのゝゝゝ。ゝく

常夏六丁オ

○清ゝまくゝみゝどりゝがはゝき前栽ゝゝゝう
ゝゝゝ行ゝゝゝ。ゝゝゝ

るるにゆくゝ春林は花紅葉はさこのりまる
よりも。たゞ春こはのゝさまうぎげるかゞ
ぞえ。あまめのーきに。ゝひまはうちたゝき
そゝるまで。たゞのかゞゝてと。ゑるはゞゆ。
冷標ナセテウ
にしはつまゞるまゞ花ゆーてたちより紛
て。月はかろよゝっとくいてえんる
オホン
ゆゝるまゝにさきせゞ見て主まふゝと
ゞけくまゝけまゞちゝうれゞめあ
けるさるまゞゞやうゝく拍ーた

紫一

まゝあそひゞいとめやゝーくひまはいと
ちこのゝゝあきたるを。
苓敬里
くひあゞゝれゞろのさずきいのゝてあ
きるやゞる風紙はまゝーゞいと高てのし
うゞひけち紛てゞゞくゝずてゞ紛
せのれゝのるゝゝ弁く自ゑくゝ山まと
れゞはまる。
伊氏君
木。あゞくたく水鶏はれゝろのゞくはの
ゞるる月ゑゝうゝいまゞーろめまとーゝまを。

なほ〻に冴し たまゝ。あゝ〻きすゞ
みゞ。うゞのほし きゝ。こゝろゞ〻よゞあゞ。

鵜川

松風サ一ヲウ
うこのひゞをめし たるまゝのさんゞうあゞ
しゆらる 物語のゝ〻ろ〻秋すゝ。
藤裏葉サ四ヲウ
ひゝりは池み。舟ゞ〻ゞけゝ。ゝ厨子所乃
鵜飼
うゝのひゝをゝ。院ゝうひをめしあゞゞ。
鵜をかうさせゝ。ちひゝ北ゝ所ゞ〻
くしまゝ。ゝゝもゝゝゝゝ。

紅葉賀サ四ヲウ
夕立
ゝゝもちして。なゞゝ涼しきゝひゝまぎれ
に。うんめいでんゝわゝ。ゝゝゝゝゝゝ
たまゝ。ゝゝ内侍ゞ。ゝゝゝゝゝ
温明殿
ゝゝ。
幻十六ヲウ
ゝ月雨をゞゞなゞのめゝし。ゝゝゝゝ
このゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夕きり
大将ゝ君ゝまゝ。ゝゝ小。花橘ゝ月

ゑこゝめ。花橘にかゝるぐんもを。ちぢる。色きこゆ。

秋々残燈有壁影、蕭々暗雨打窓声。

ひぐらし。てきこゆる。しきゝ時なる。蛍のこゑ。

このあこがれどきはやのに。鶯のなりをりそれ
しいかぜなどそうけまこぎ。風ををみ。
しふをせまんかぜまるほどに。俄のうちに
いでるむ。雲はけしきいとあやにくなるく。
はがくしう降る雨まろひくざをみく
しるぞさう涼を。水まばゆく。赤くまん
ちするにまぶ城に色をどめぬ。しか
ぬ。ぬるゝと城にうちずし行くを。をりのう
すやいもの。はなるはせまるきの印

きぬにかゝるはを
ばな。

しをまり。

納涼

第木世四丁オ

きれうみまく。あらしくにそのうまきる人
は川はわるる家まこはごろ水せ
きいきく。すゞしきこのあにそゞとこゆ。
つ世五丁オ人殿はしんのしわをてさしひあけをて。
このうめは沖にはひしたるはかはつゞく
るどうるをまにおしくもるのとうおう
う家たそしばゞきこて。前栽をのこ

くろ[illegible]めくらゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]

あしがるのこしもとに、ねぎ、ゆるさるる。
もやうよりかへりて、ものをかるこの魚。
あまびきどもそ。すきまぐんぐんと、身がかんら
しぐさのりんあそび、こそとのぬぐはよ。
こそよくだよ行みぐるしぐるせみあん
とすすすすめぐ〳〵くめぐさかめぬ
ぐりんとよすりてきの世紀へあこ〳〵ま
くれさまじをるこちゝせいん世界
とも。れぐそしのるまやまどのつまくどあづ

らしまこと〳〵てぐらちぐこさそこんらものがう
そもおぐはく〳〵ねぐそ。かこまるたるやうにく皆
いと係しきさるうらんぐせれのたく泊く
さかしひ行ふ。
○月五十オ 夕方はあゆくぐをすぐこそ。うくら
くわのき〳〵こうをおそひまう。

舞火

常宝世六十ク

いとこうしげまれのようかぐを火がそれの
げりやり水れはるるに鬼まぐの人を尚の

この[illegible]
れそ秋[illegible]。

常夏七丁オ

○月こそあるさくらまきぞどう[illegible]なれば[illegible]

ぶ[illegible]まわ[illegible]る。源氏君川

やか[illegible]ぬ[illegible]ようよけ[illegible]ぬ[illegible]人ゆ[illegible]て[illegible]

つ[illegible]ぶいしさ[illegible]。こ[illegible]ことをす。

舞歌三丁オ

[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

きてぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]御(オホン)供する右近のさうの[illegible]

めてぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

御やり水ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

なゝ月の比 夏ゝやゝゝ秋蛍
あちこちいろ西
などのふるさと[illegible]

[illegible]ぶ[illegible]たる。まゆ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

どうおぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]御(オ)前(ベ)ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

世所ぶぞ〜と〜みをれ〜てけ〜ぴまく
より見のる火ひ〜ぽるるよ〜ぶぽの
このよ〜ゑ〜り。

若紫十二ノ十オ

○ぴるいと〜ぴにあり〜てれるで木草
ぜ〜う〜ゑ〜ゑ〜ゑ

を。やり水にきはに前栽はそもだちたる。
涼しうもあるべしとこゝろ見てなるべし。
あるもいとしれぬことよそのまゝにまをかく
御こゝろざしめくだかさるゝことなるべし
身入とりて。御けしきを紙をすぢ。つゝせ
うしたいのうもたそる。

紫文製錦一巻畢